

火星

平成二十四年十二月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

これからのことみせばやを咲かせつつ

丹後

時雨傘ひらく幸ひさはにあり

鯨幕冬満月め隔たりに

きらきらと水衰へる枯いばら

奈良町や先ざき晴れて茶の咲いて
短日の寺を出でゆく水の音
夫覚ますごとく煮凝揺らしけり
寝酒してとりのこされしころあり
葱雑炊なんぞに涙することも
椿象にてこずりひとり年詰まる

太白星

無花果の乳のにほひに雨あがる
ひとりづつ水渡りきし釣舟草
初鴨や潮入川をさわがせて
給食の真白き帽子九月来る
中華街の赤門ぬける秋の風
秋しぐれ馬車道の灯のにじみけり
夕しぐれ縞馬の縞うすれけり

杉浦典子

浜口高子

月代や沈められたる柴の籜
じゆずだまを鳴らして活けし良夜なる
横貌の鯛が生簀に夜の秋
くづれやすき仏の菓子や秋暑し
明石蛸を父の提げくる秋の風
木の股に猫のしつぽや秋の風
月明に引き揚ぐ空らの魚籠雫

火星作品

山尾玉藻選

夜の秋の母のはなさぬ頭陀袋
大和郡山城 孝子

せきれいの叩きし水に手を浸す
鳥うごき鳥籠うごく秋の昼

てのひらへ月に冷えたる鹿の息

つまだちて夫探しぬる秋の暮

祭壇に燐寸のすられ冷まじき
八幡坂口夫佐子

てのひらにたこ焼の舟無月かな

うつばりに蠶螂のぬる夕餉かな

末枯や赤信号に母止め

茶の花へ頤あげし刃物売

初風や森の浅きにとりけもの
神戸深澤 鱻

布引に深き空あり秋つばめ

八朔や金糸銀糸の塵あつめ

耳遠の兄の大食ひ水の秋
金屏の秋の名草へ土間の風
ゴンドラは莢のかたちよ秋高し
二百十日のゴンドラに浮きぬたり
經典にルビのぎつしり秋収
傘ひらく音立てにけり秋の山
赤とんぼ気圧の谷というところ
指先にわさびのかをる無月かな
花そばの風に日傘をたたみけり
蕎麦の花夫の足元見てあゆむ
後ろから母のぞき込む大根蒔
虫籠ののる座布団の錆朱いろ
山峡は日差し蓄ふ蔓たぐり
ひと皿の葡萄に夜気の深まりぬ
ねこじやし振つて家路を遠くせり
諸蔓の刈られし嵩に島の雨
うす紙に丁子のにほふ秋の昼

穴 栗大東由美子

宝 塚山本耀子

蘭定かず子

選のあとに

山尾 玉藻

この祭壇は家庭の小さなものではなく、寺院の何段も重なった大きな祭壇と思える。薄暗い祭壇に上った僧が臘燭を灯そうと燐寸をすった瞬間であろう。暗がりにぼつと浮かんだ小さな炎に、作者は身のうち深く晩秋の寒さを覚えたのである。恒星園作品へ黄落や水上ポート尻振つて、水上ポートは水面をぼんぼん飛び跳ねるように駆けるが、それを背後から捉えて「尻降つて」とは愉快的な把握である。明朗で躍動感がある。

鳥うごき鳥籠うごく秋の昼 城 孝子

風に揺れ動く鳥籠を見ても何の不思議も感じない。ところが作者は、風のない軒下か或いは家うちで吊られた鳥籠が揺れ動く不思議に注目した。よく見ていると籠の中で鳥が動く度に籠全体が微かに動いている。小さく軽い鳥が大きく重い籠を揺れ動かしているところに驚きがあり、発見がある。「秋の昼」のひっそりとした一刻であっただけに、作者にとつてこの驚きと発見が一層新鮮でインパクトあるものであったに違いない。誰もが見過ごしている些細なことを純粹に不思議がり、それをじつと見詰めることでものごとの真実が見えてくる。写生と言う手段に依る俳句の醍醐味はここにある。同時発表作へつまだちて夫探しゐる秋の暮は、「秋の暮」を据えてどこか不安感と簫寥感を漂わせていて、この夏に主人を喪った私の胸に深く染み入る一句である。

祭壇に燐寸のすられ冷まじき 坂口夫佐子

耳遠の兄の大食ひ水の秋 深澤 鱈

耳の遠い人と話す場合は相手を思いやる繊細な心遣いが求められ、寂しさを感じさせないように心配りも要るだろう。耳遠の兄上に何かと気を遣う作者であるが、しっかりと食事をなさる様子にまずはひと安心というところ。とは言え「水の秋」を取り合わせたところに、兄上の胸中の孤独感を思わずには居られぬ作者の慈しみが伝わってくる。へ初風や森の浅きにとりけもの、秋の「初風」で森の生き物たちを包む涼気を思わせると共に、一種の主観である「森の浅きに」が秋の趣である人懐かしいあわれを漂わす。
(以下略)

恒星圈

戸田春月

秋澄むや円空仏の粗削り
水澄むや古代の貌の井守ゐて
良寛の細き顎や青瓢
色糸のさしこのベスト飛驒の秋
椿象にはて面妖な吊りランプ

高松由利子

野澤あき

グラス手に無花果煮つめぬて饒舌
かりがねや十歳の子の瓦版
篠山の媼そだてし葡萄棚
須磨浦の鉄路はさみし虫時雨
東国よりもどり露の身となれり

青空のぼつかりとあり萩の寺
触るるものなべて露けき寺にぬし
東光院しづかに秋の暑さかな
白萩の乱るると云ふ盛りかな
そのなかにひつそりとある芒の穂

戸栗末廣

波田美智子

暮れきつて音を絶やさず落し水
蘆原の昼の闇より羽の音
占ひにひらく手の平夕月夜
数珠の手を芙蓉の風の過ぎにけり
草山の穂の揃ひたる秋つばめ

前を行く人の影踏む秋の暮
箸休めちちろ虫聞く一家かな
諸焼いて女二人の昼餉なり
草紅葉この身このまま過ごしたし
視野検査受くる暗室鳥渡る

獅子座

山尾玉藻推薦

湯谷良子

良夜かな仏足石に金の渦
まんだらを素足で巡る月の寺
きちかうの開きし音を疑はず
敬老の日の祝券仏前に

川端俊雄

颯風の逸れたる夜の塗柄盃
蛸壺にこもる風音九月行く
鶏鳴や風に色なき漁師町
雲の上に雲の照りゐる野分あと

田中文治

三輪山は雲の中なり桐一葉
雁塔の影を踏みゆく秋遍路
をみなごの一人はなれて椎拾ふ
寺の扉のしづかに重し今日の月

西畑敦子

夜の秋の樟脳匂ふ奥座敷
月の縁貫うてきたる犬眠る
さきほどの鹿の来てゐる彼岸寺
高階に零余子こぼるる暮しなる

涼野海音

カウンター席の空きある良夜かな
箸置に短き箸や年尾の忌
とんぼうのしづかに交む坂の上
前を行く人の触れたる烏瓜

藤田素子

区役所の玄関に咲き曼珠沙華
秋扇せはしくつかふ准教授
ジーンズの破れも傷も爽やかに
本を読む横顔草の絮ながる

西村裕子

ライダーのブーツの触れし曼珠沙華
励ましの幼き文字や小鳥来る
燦としてホテルの花舗の花芒
月白や老舗のれんの真さらなる